



【 平成28年度 審判員の目標 】

(公財) 日本ハンドボール協会審判委員会
日本ハンドボール協会指導委員会

1 正しいステップの評価と判定 (競技規則 7:3(a)～(d))

ゲームがスピードアップされ、身体接触を含む1対1の局面がより厳しくなり、ボールを使ったテクニックやフェイントのテクニックが発達した。

レフェリーは「感覚」のみに頼ることなく、プレーヤーの技術を正確に見極め、正しく判定することができるように絶えず研修と分析を行うこと。

①ステップを判断するための重要な2つの基準

- プレーヤーがボールをキャッチしたり、つかんだりした瞬間を正しく観察する
- キャッチした後、床への着地をどのようにしたのかを正しく観察する

②ドリブルが終了した後の1歩は、例外なく「1歩」と数える

2 ハードプレーとラフプレーの見極め (競技規則 8:1～3)

競技規則第8条「相手に対する動作」は攻撃側、防御側の双方にあてはまる。レフェリーは身体接触の際、攻撃側プレーヤーと防御側プレーヤーの位置関係はどうであったのかを正しく見極めなければならない。

①防御側プレーヤーが攻撃側プレーヤーの正面に位置し、攻撃側プレーヤーの安全面を守ることが前提であれば、接触の度合いが強かったとしても、これはハードなプレーとして認めるべきである。これは、防御側プレーヤーが攻撃側プレーヤーの正面を維持しながらついていく場合も含まれる。

②たとえ正面であっても、空中でパスやシュート中、またはその後の選手を突き放すような行為は、ラフプレーであり、許されない。

③横や後ろからボールを対象とせず、不利な位置から接触を試みたならば、競技規則8の2、8の3の判断基準をもとにラフプレーとして判定しなければならない。

<研修課題>

- スポーツマンシップに反する行為については毅然と対応する。

「平成28年度 審判員の目標」の補足説明

(公財) 日本ハンドボール協会審判委員会
日本ハンドボール協会指導委員会

1 正しいステップの評価

- ステップの判定は永遠の課題である
- 競技規則を変更するわけではない
- 「感覚」を身につけるだけでは十分ではない
- 必要なのは「努力すること」「映像を見ること」そして「分析すること」

(1) ボールを持った移動— いつステップをカウントするのか？

ステップを判断するための重要な2つの基準

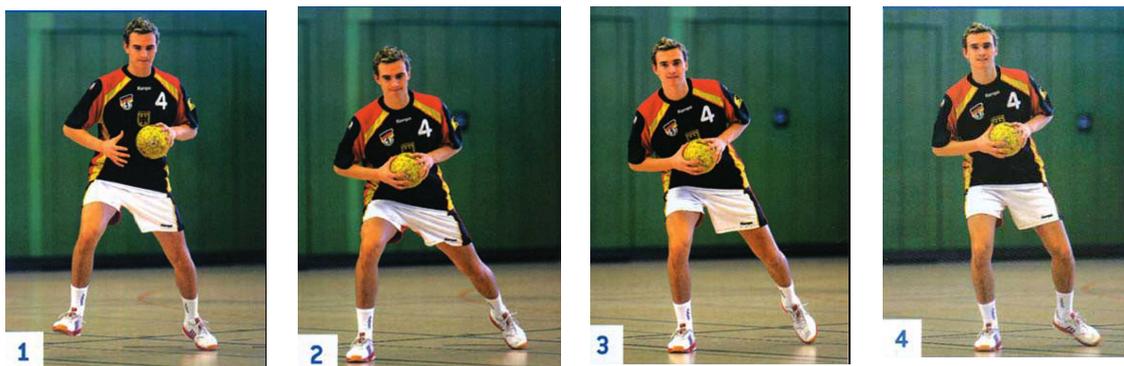
- ① プレーヤーがボールをキャッチ（すなわち、ボールをコントロール）したり、つかんだりした瞬間
- ② その後の床への着地

競技規則では、起こり得る場面を3つに区別している。

プレーヤーがボールをコントロールし、なおかつ：

1. 両足が床に着いている場合

プレーヤーの次のステップ（ボールをバウンドあるいはドリブルすることなく）は、許される3歩（連続写真と競技規則7の3(a)参照）の第一歩としてカウントされる。



プレーヤーの両足が床に着いている。片足を持ち上げ（写真1）、移動した後におろす（写真2）。これにより、1歩ステップしたと見なされる。もう一方の足を引き寄せても（写真3、4）、ステップとして更にカウントされることはない。

2. 片足が床に着いている場合

走っている最中によく見られるが、ボールを受け取る、あるいはつかむ瞬間まで片足は床に着いたままの場合。次のステップは、許される3歩うちの第1歩としてカウントされる（競技規則7の3(b)参照）



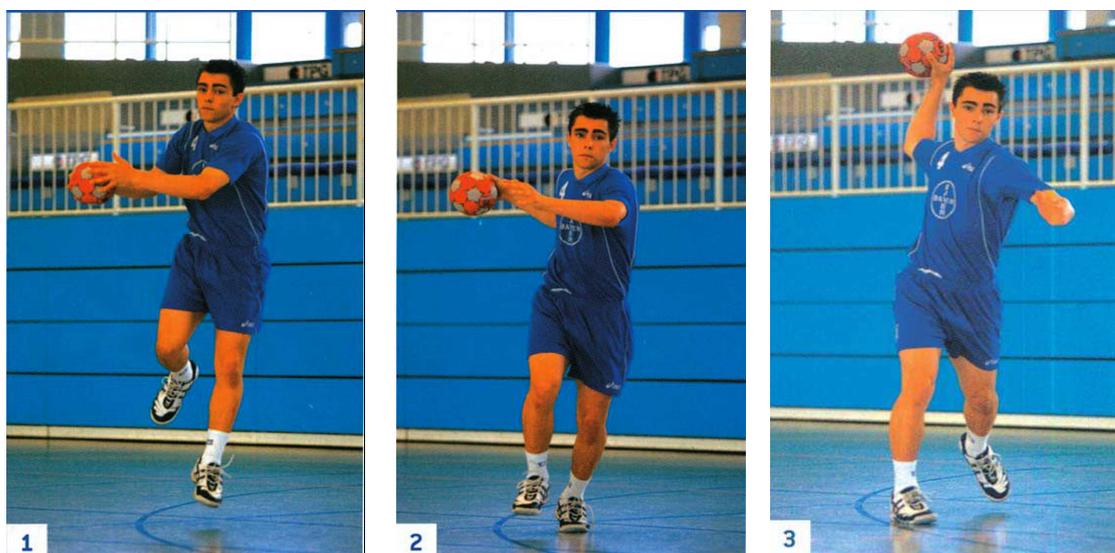
プレイヤーが前方へ移動しながらボールを受け取る。ボールをキャッチしたとき（写真3）右足が床に着いている。左足による次のステップは1歩としてカウントされる（写真4）。

3. ジャンプ中にボールを受け取る

ボールを受け取る際にプレイヤーがジャンプをしている場合、着地の仕方は2通りある。

①片足だけで着地をする（連続写真、競技規則7の3(c)）

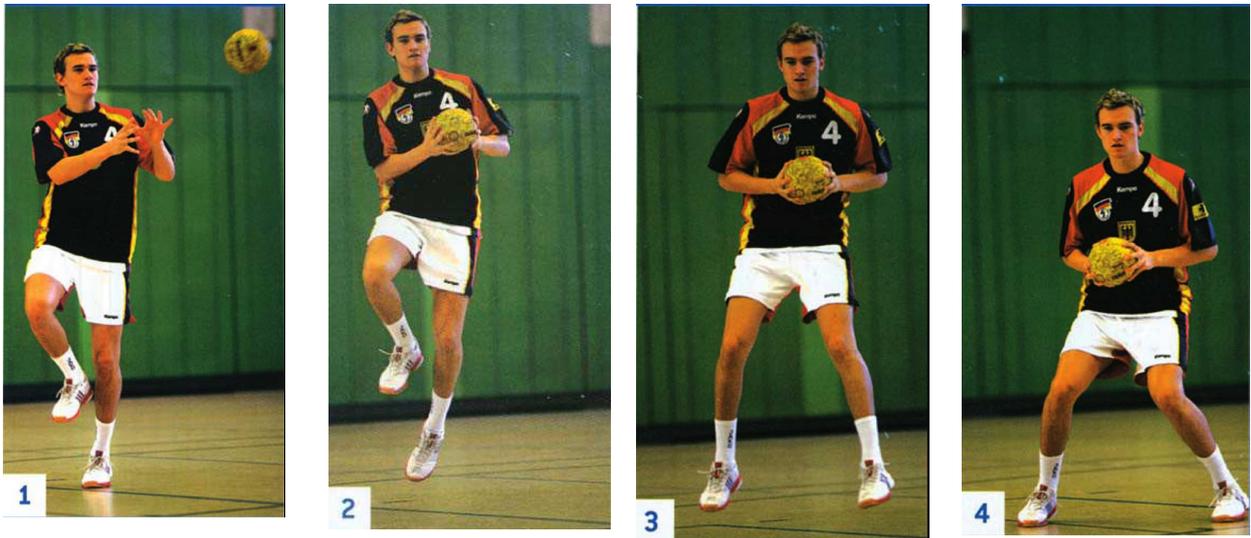
この着地は、許される3歩の第1歩目としてカウントされない(0である)。3歩の第1歩目は、プレイヤーが床に次の足を着いたときにカウントされる。これは、同じ足でも（ホップ：連続片足ジャンプ）、異なる足でも（ステップ）同様である。プレイヤーは、走りながら（あるいは1歩で）シュートを撃つために、この様な方法で（連続写真）ボールを受け取るためにジャンプすることが多い。



② 両足で同時に着地をする（連続写真、競技規則7の3(d)）

同様に、プレーヤーがジャンプしてボールをキャッチしてから、両足で同時に着地した場合、この着地は、第1歩目としてカウントしない(0である)。

レフェリーにとって、ボールを受け取る瞬間に、プレーヤーの足が床にしているか否かを見極めることは難しい場合が多い。



連続写真で示される例は、プレーヤーがゴール前で1対1を仕掛ける際、前方へ床すれすれの低いジャンプをする。このとき、様々な動きの組み合わせが可能である。例えば、ジャンプしてボールを受け取ってホップまたはステップで一旦着地した後、ジャンプして横に足を開いた基本ポジションを取りながら両足で同時に着地をする。しかし、この様な動作は許される歩数の1歩を既に使っているとみなされる。

(2) 実践での課題

ゲームがスピードアップされ、身体接触を含む1対1の局面がより厳しくなりボールを使ったテクニックやフェイントのテクニックが発達して、レフェリーの判定がより難しくなった。ゲームのスピードが速くなったため、レフェリーは一定のパターンを頭に入れておく必要がある。

攻撃プレーヤーがスローのとき、相手の頭を越して腕を上げるようなプレーヤー間のコンタクトは、レフェリーにとって、判断に苦しむところである。(連続写真)。

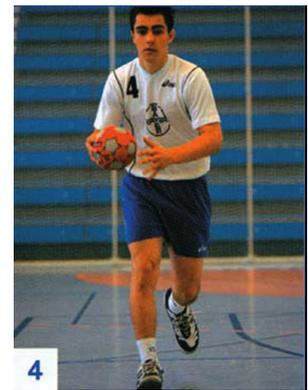
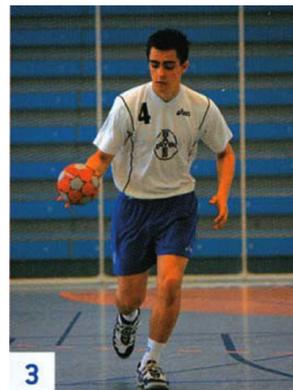
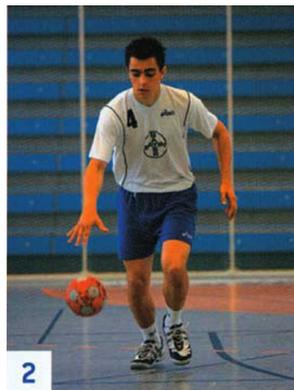
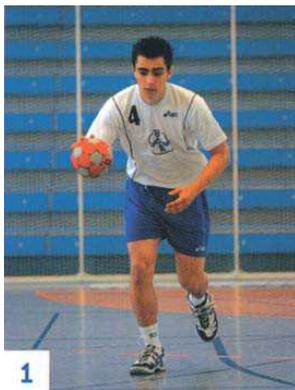
この例として、攻撃プレーヤーが利き腕の反対側への突破を試みるときに、相手の頭越しにボールを持った利き腕を動かしている。この動作の過程で何が起こるか(身体接触が発生する可能性あり)によって、何歩ステップしたかを判断することが大切である。防御行為の正当性を見極めもまた重要となる。



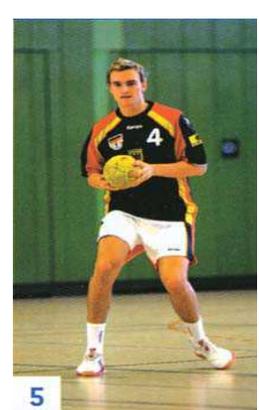
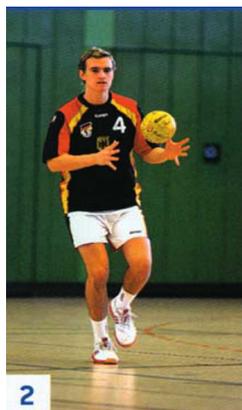
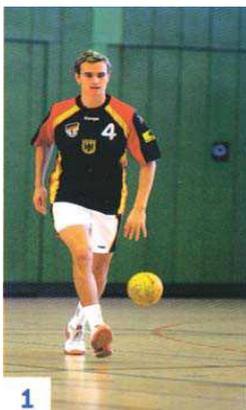
ジャンプから基本の位置取りをした後、攻撃プレイヤーは利き腕の反対側へ右足をステップすることで防御プレイヤーを斜めに抜き去ろうとしている（写真1）。プレイヤーは、左へステップするときボールを持ち替えている（写真2）。「0歩」でボールを受け取れば、次の左足のステップは、2歩目としてカウントされる（写真3）。

（3）ボールをバウンドさせる

ドリブルが終了した後の1歩は、例外なく「1歩」と数える



プレイヤーが（片手または両手で）ボールを持ち、床に向けてボールをつくことで、ドリブルが始まる（写真1）。プレイヤーがボールを床にバウンドさせてから、片手または両手でつかむ（写真2・3）。右足が着地したときに、第1歩目がカウントされる（写真4）。



プレイヤーはボールをドリブルし（写真1）、ボールをつかみ（写真2・3）、ジャンプから基本の位置取り（写真4・5）をとる。

写真3が重要なポイントである：ボールをキャッチしたときにプレイヤーは床に足が着いている。この基本の位置取りをとるためのジャンプは、第1歩としてカウントされる。

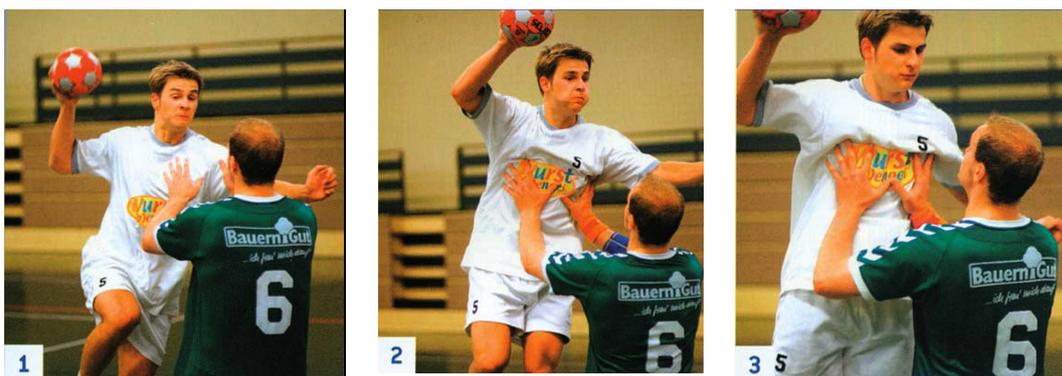
2 ハードプレーとラフプレーの見極め

競技規則第8条「相手に対する動作」は攻撃側、防御側の双方にあてはまる。**レフェリーは身体接触の際、防御側の位置はどうであったのかを正しく見極めなければならない。**

（1）ジャンプしている攻撃プレイヤーに対する防御行為

連続写真に見られるように防御プレイヤーは攻撃プレイヤーの正面に位置していればジャンプしている相手に対して身体接触を試みる事が許されている。この状況を含め、攻撃プレイヤーの正面で位置を取り、競技規則8の1の状況であるならば、防御プレイヤーは相手の安全面を守ることを前提とした防御行為が保障される。レフェリーはその防御行為の正当性を認め、接触の度合いが強かったとしても、これをハードプレーとして認めなければならない。

防御プレイヤーは腕を伸ばしてジャンプしている攻撃プレイヤーの安全に影響を与えるような行動は許さない。防御プレイヤーは攻撃プレイヤーの正面で接触する必要がある、横や後ろからボールを対象とせず不利な位置から接触を試みたならば、競技規則8の2、8の3の判断基準をもとにラフプレーとして判定しなければならない。レフェリーは、防御プレイヤーが素早く正面で接触できる位置をとっているのか、もしくは横もしくは後ろから押すことをしていないかを観察する。



攻撃プレイヤーが防御の正面でジャンプ（写真1）防御プレイヤーは勢いに対抗するために前に動くことなく曲げられた腕を用いる（写真2）。防御プレイヤーは実際には攻撃プレイヤーへの前の動きを吸収し、攻撃プレイヤーの安全を守らなければならない（写真3）。

(2) 防御側プレイヤーの位置と防御行為



腕を伸ばしきって身体接触をしている。それによって相手は後ろに押された。

押す・突き放す行為については罰則を段階的に適用する(相手が空中であれば即座に2分間退場もあり得る)。



攻撃プレイヤーは、ゴールに向かっている。防御プレイヤーは、横の悪い位置にいる。

レフェリーは防御側が不利な位置にいることをまず認識し、違反が起こるかもしれないことを想定しておくべきである。



防御プレイヤーは攻撃プレイヤーの後ろからチームメイトの方向に押した(写真2)。この違反もかかわらず、攻撃プレイヤーはボールをコントロールしパスした(写真3)。攻撃プレイヤーは右側で2対1の数的優位の攻撃をした。**最初にアドバンテージを認め、それから段階的に罰する。**